

全国図書館大会での大学図書館部会の分科会の充実を望みます。(いつも余り…)
研修の機会はいくらでも個人が参加できるチャンスが増えます。(同じテーマで同じことを回ったとしても7人の係ではやっと全員が参加できる。(係から2人以上同時に参加できることはあり得ないので)

大学図書館部会の活動内容をもっとPRする必要があるのではないのでしょうか。

個別のテーマによるグループディスカッションの場や、継続的な研究活動の場の提供。(個人がある程度自由に参加できる環境で)

情報の積極的な公開、伝達など。

正直に言って、どこからどう参加していけるのかが良く分からないので、所属している意識が薄く、活動内容も分かりにくい。すいません、勉強不足で。

JLAの活動は公共図書館中心というイメージが強い。大学図書館は国公私大図協力委の活動を充実させればよいのではないか。

大学図書館シンポジウムが毎年開催されるならば、大学図書館研究集会』を廃止してもよいと思います。ただし、日図協の大学図書館部会として、公共図書館等との協力連携をさらに深めるための何らかの方策を探究して頂きたいです。

日本図書館協会は初に大学図書館を相手にしている際、部会もついで、個人・施設会員共に評議員、理事を引き上げたらどうですか。事と次第によっては会員も引き上げて別組織を立ち上げる、とか。栗原理事長時代と全く、協会における大学図書館の扱いが変わらないように思えて仕方が無い。それどころか、ますます力が薄くなる一方。公共図書館はそんなに巧い！

今年度採用されたばかりで、まだ事情をしっかりと把握しておりませんが、新任職員にとって研修は能力向上のための大切な機会だと思います。是非テーマを厳選し、数多くの研修会を提供いただければと思います。

自分のつとめ先と似たような状況の図書館の様子や、先端に行く図書館の様子を知りたいです。

なかなか研修にでかけられないので、専門誌があって、勉強させてもらえるといいと思います。

類似したシンポジウム・研修をあちこちでやられても、少人数の職場では、出席しにくい。共催で、本当に身につく良い研究会を開いて欲しい

大学図書館部会の存在意義は大学図書館固有の問題に対処するとともに、図書館界全体の問題に大学図書館という立場から、他種図書館と協働して対処することにある。後者の役割は、国公立大学図書館協力委員会では重要視されていないのではないか。その意味で大学図書館部会の存在は有意義と考える。ただし、研究集会に関しては、開催方針や内容が類似しているのなら、一本化して共催という形でもかまわないと思う。

個人会員と部会との距離が遠く、部会の活動が見えてこない。部会に所属する意義が実務に反映されない。

大学図書館研究集会の活動自体を知らなかった。

部会としての活動方針を告知する必要があるのではないか(他の部会にも共通していることではあるが…)

公共図書館との結びつきも多々見られるようになってます。相互貸借、文献複写等の全国ネットワーク構築を検討される時期だと思われます。

JLAの中の部会」なのだから、そのことを生かした企画や活動があってもいい。他館種との合同企画や比較研究など。図書館外の出版社や書店、自治体等との交流も、もっとあってよい。

JLAの大学図書館関心は、協会財政支援のみ。JLAと独立した協議会新設して、高次の情報専門員の職制確立を検討の時期。公立図書館司書採用は0(ゼロ)入力者注)に近づいている。このままでは、大学図書館員制度崩壊もありうる。

大学図書館を退職いたしましてから久しく、最近では地域のこども図書館をつくる活動に従事しておりますので、申し訳ありませんが、大学図書館から関心がはなれております。

予算が減少する中で、研究・教育環境を維持するため、司書として何ができるかが今後の課題です。

現在、大学図書館司書職として採用している形態をとっている大学は少なくなっています。大学図書館職員としてあるべき姿を考えるのではなく、大学職員としてどうすれば良いかについて教えることも活動方針の一つとして取り扱ってはどうかと思います。

大学図書館関係の集会は、できるだけ数多く開催されたほうがいいです。職場からの出張というかたちで参加するので、いろいろな地域でいろいろな時期に開催されるとありがたいです。

大学図書館部会として、もう少し特化したテーマと取り組んだり、独自性を前面に出した方がよいのでは。

個人会員選出委員の人数が少ないような気がする。そのため現場の抱える問題がテーマとして取り上げられにくいのではないかと。このような集会・シブは大いに開いてほしいが、参加しにくい職場の現状をどうするかが問題で、個人の意識だけでは解決できない大きな課題だ。

部会の活動情報等をメールで配信・受信できたら、情報の鮮度が維持できるのではないのでしょうか。また、端末なら他の作業中でも確認ができると思います。

大学図書館研究集会は独自に活動を行い、必要があれば、国公立大学図書館協力委員会と情報交換や共同で研究を進めるのが効果が上がると思います。

アンケートの実施について、大変良いこととうれしく思っております。日本の図書館界の実状は、資料費も減少し、図書館専門の職員も少なく、質も低下しています。今こそ、全ての図書館が協力して、図書館の活動を維持・強化する必要があります。大学図書館も協会に参加し会員（施設会員も含む）の組織率を高め、部会もそれなりの活動を進め、その責任の分担を負うべきだと思っており、高所から考えて、ご考慮いただきたい。そして、未来の見える図書館界への構築を図っていただきたい。

私立大学図書館協議会や国公立・・・委員会があり、それぞれ大学図書館員向けの様々なプログラムがある中、大学図書館部会の活動は組織ベースではないためか、情報も入手しにくいし活動もはっきりしない。また各組織の目標や位置づけが明確に分かれていないわけでもないため、まず大学図書館部会が他の団体と何が違うのかということを確認していくべきではないか。

大学図書館研究集会には一度参加したが、とても勉強になったので、できるだけ続けて欲しいと思う。

学部単位の小規模図書室や資料室の運営方法や事例紹介もして頂きたい。

大学図書館シブ・ジウムへは、日図協大学図書館部会の個人会員であれば、無条件に参加できるのでしょうか。国・・・協力委員会との共催なら参加できますが、上司命令でなければ出席できなくなる状態では、問題が多いと感じます。

様々な集会や研修会が多くあった方が良くと思う。公立図書館では、図書館員のステップアップ研修があるが、大学図書館にも必要であると考えます。

大学図書館員の日本図書館協会の会員数が、少ないように思います。大学図書館部会の組織拡大をはかる必要があるのではないのでしょうか？

予算や人員の削減など出張に出るにしても費用の面でも、人的な余裕の面でも年々難しくなってきました。類似した内容のものが集約されて行くのもやむを得ないと思います。（本当は多くの機会が提供されるのが望ましいと思います。）

同じような大会が2つある必要はないと思います。日図協＝公共図書館中心のイメージがあるせいか職場でも会員になっているのは少数です。

大学図書館部会の議事録をHPに載せてほしい。

日図協そのものに公共図書館中心の面があるため、大学図書館部会の活動がなかなか見えづらく思える。

図書館大会やシブ・ジウムなどに、現在の職場状況では参加しにくい（できない）ので、様々な形で部会員への情報伝達をしてもらいたいと思います。

大学図書館部会の総会の直接の参加者は委員のみに近い状況から、この部会そのものの存在に対して疑問を持っております。

また、研究集会の開催は毎年開催から隔年開催と縮小した経緯もあり、一方では研修会やシブ・ジウム等々、図書館に係わる会合が多くあります。種々の協会や機関で企画・開催されるこれらの会合をもっと集約できないかと考えております。極端な意見になりますが、日図協から大学図書館部会が離れても良いのではないかと考えております。

大学図書館員どうしがもっと交流できればいいと思います。部会員として今までほとんど意識したことがなかったので、部会ホームページがあることも初めて知りました。これを機に部会に関心を持ちたいと思います。

いまだに申込書を書かせない(申込書を書かせることのない)複写がまんえんしているのは、重大な法令違反ではないかと思うのだが、遵法を大学図書館部会で督促すべきではないのか。訴えられないことをいいことに、簡便な方法に依拠することは、法を遵奉することを義務つけられている独立行政法人には許されないのではないのか。

類似したシボヅリの重複開催ということは、双方にとって不都合な事態を招くと思われる。

日本図書館協会の中での大学図書館の位置づけを明確にし、活動を推進する必要があるとともに、『研究集会』は協力委員会のシボヅリに絞る方向で検討することが望ましいのではないか。

両団体が共同して開催できるなら、できるだけその方向ですすめてほしい。

大学図書館の問題は多方面にわたるので、様々なテーマに対応できるようにしてもらいた。

大学図書館研究集会が始まったのは1980年代の初めで、当時文部省主催の学術情報システムと国立国会図書館が主導しつつあった図書館事業振興法との妥協の産物のようなかたちでした。本来なら大学図書館研究集会は、図書館専門職員として大学図書館問題にコミットする集会であるべきでしょうが、当初から文部省(現文科省)の意思伝達機能的な集会上にしかありません。したがって、大学図書館シボヅリと同内容になってしまい、研究集会の意味がなくなるのは仕方がないでしょう。日図協の個人会員に大学図書館員が少なく、巧人は文科省の意向の体現者がほとんどなので、こうなるのもいたしかたありません。独立法人化で文科省からも見離されるかも。そろそろ目を覚ました方がよいと思うのですが、私としましては、まだ日図協の方にかすかな希望もっています。

図書館協会の他の部会や協会企画の多岐に亘るテーマ問題提起を図書館人として共に考え、取り組むこと。【以下、判読出来ず】

私は、日図協に加入していますが、部会に入る意思表示をした覚えはありません。図書館員として日図協に関心を寄せ盛りたてようという気持ちです。大学図書館という切口では、私大図協や国公私協力委の企画に積極的に関わっていますし、今後ともそうしたいと考えます。国公私委員会は、法人格を取得して強力な組織にすべきだと思います。

もう少し活動情報を周知して致(*マ)きたいと思います。

シボヅリでは、グローバルなテーマを取り上げ、研究集会では、実務的なテーマを取り上げるなど各々の会の性格を明確にし、開催されれば、各々の存在の意義があると思う。

独自の目的意識(テーマ)や方針を持つことが大学図書館部会に求められると思います。あるいは関係者内にとどまらず、広く活動をしらしめることでしょうか。月並みですが。

大学図書館シボヅリであまり扱わないテーマを取り上げるようにしてはどうか。司書の専門性とか、外注の是非など。

大学図書館員専門性向上について、リカ教育について日本全体を索引して行って欲しい。

大学図書館の研究集会ですが、図書館、大学、学部の種類によって、問題が様々ですので、共通テーマを決めにくいように思われます。部会を充実させ、種々の問題を話し合える集会にして欲しいと思います。

『大学図書館における複写に関する実務要綱』はリスト・合理化時代に意味がありますか。現場をよく見て対策を考えるべきです。一橋の右の北機は十分に管理できていますか。申立書との点検などしていますか。図書館雑誌に報告して下さい。

毎年開催を実現してほしかったので毎年の件はありがたい。日図協と大学図書館との調整をあきらめず追求してほしい。

『学術司書』、『上級司書』等の資格認定につながる現職大学図書館員の継続的な研修プログラムの開発と実施を望みます。大学図書館研究集会や協力委員会のシボヅリ等は、現在のところ時代の「ヒックス」を取り扱っており、別の意義はあるのですが…。

個人会員選出委員について、経費支弁のない現状では、会議の開催される会長館(地区)の大学図書館員にお願いする方法がベターだと思います。役員館が1~2年任期、個人会員選出委員が3年任期というサイクルの問題はありますが…。

大学図書館としての課題と、その前に図書館としての課題を考えていくべき必要がある。

図書館協会の中の部会としての特徴を活かした(他部会とのつながり、図書館界の中での大学図書館の役割など)研究活動または指標となるような提案を行っていただきたい。

情報があまり知ることが少ないので(個人会員のため)、部会情報をもう少しくわしく知りたいと常に思います。

東京のみの開催が多く、地方の者は興味があっても参加しづらいので、それを改善して欲しい。せめて大阪とか増やして欲しい。

大学図書館シボゾウには、機関として参加者が選ばれるため、自費で休暇をとって参加はまずできません(カクのやりくり等)。個人が参加することを意識した(所属機関に縛られない)研修等を考えていただければと思います。

大学図書館員の大部分を司書有資格者にする。
日本図書館協会員を優先して雇用する。
専任職員の拡大。(パート派遣からの昇格を義務化する)。雇用問題を最重要課題にして活動してほしい。

大学図書館部会が何をやっているのかが具体的に見えてこない。現在、契約で働いており、経済的に不安定であり研修も受けられない等の問題があるので、そういった立場の人を支援し研修の場を設けるなどの活動を個人的にはお願いしたいです。

(国公私)シボゾウは、レベルが高いきらいがあり、初めて図書館勤務となった者にはハードが高過ぎるきらいがある。共催はむろん可であり、継続してほしいとは思ふ。ただ重複は避けるべきと考えるので、部会の方は初心者にもしぼってやるということもある。

IFLAの機構もそうであるが、図書館関係団体(協会)は、グラブ的な活動と、ワイヤな活動のバランスの上になり立っている。JLAの場合、あまりにグラブに頼りすぎている。(それを民主的と誤解している人が多い)。委員会はそれでもよいが、部会は、組織として、管理職的な立場から参加して、組織(各大学)が持ち回りで責任を持って運営するとよいと思う。

研究会等は、共催でなくても良いと思います。別々に、違うテーマで開いていただくと、こちらとしては勉強の場が増えて嬉しいです。(開催する方の労は大変だと思いますが…)

研究集会を主要な活動とすると、国公立大学図書館協力委員会と活動が重複してしまう。大学図書館に共通の問題を取り上げて、情報を流す、職能団体として、それらに検討を加え、集会を企画したり、出版活動につなげる。という方を基本とすべきであろう。(委員の方には負担が大きくなるかも知れない)なお、部会員は出張で参加できるように手当を行うべきであろう。(借からさんざん問題にされていることと推察しますが)

他の部局に移動(*マ)したため、図書館とは直接関係なくなったため。

ALAのように、部会ではなく、Associationとして独立・自律的であるべきだ。母体をJLAと共有しても、活動をJLAのもとで展開(*マ)する必要はない。

大学図書館員は必要性(アツ加)のように(マ)が望ましい)を認識すべき時期。学卒では研究水準ではない。日本は学力低下しているので尚更である。

シボゾウ開催などを否定するものではありませんが、大所高所からの提言であったり、あるいは逆に、旬の話題や大学図書館員の生の声、新聞記事にはならないような大学や大学図書館の動き・ニュースなどを図書館雑誌又はメルマガジに毎号でなくてもよいからできるだけ頻繁に掲載するような事はできないでしょうか。

個人としてのJLAの会員が、個々の大学や館種の枠を超え、情報の共有や繋がりを持てるような活動を期待しています。

日本図書館協会に入会する際に、所属部会を選ばなければならなかったのが、勤務先の館種で選択したにすぎない。したがって、失礼ながら、大学図書館部会には特に期待していることはない。

(他の職場も同様と思うが)容易に休暇を申請できるような雰囲気ではないので、シボゾウなどへの参加は難しい。職場での所属が、図書館とは言え、シボゾウ関係の部署なので、出張扱いとしての参加も難しい。平日の通勤時間が負担になっているので、土・日・祝日はゆっくり休みたい。

大学図書館員にとって、緊急の課題は、大学の情報リテラシー教育への積極的参画、リエンションや講習会、レアルサービスなどの(指導サービスの展開、そして、その結果としての、学内のおよび社会的な専門性認知にある。

数年内に大学図書館員の力量を引き上げるという具体的な目標を立てれば、中堅・上級の研修内容をeラーニング化し、これを研修事業として成り立たせることが必須である。規模の拡大には研修の(いつでもどこでも)化というコンセプトが有効であり、たぶんこの方向にしか打開策はないように思える。

この際、大学図書館部会が総力を挙げて取り組むべき課題を明確に示し、それをJLAという枠組みで実現できるのかできないのか、できないのならばどうするべきかを現実的に問い詰めるべき時期に来ているのではないか。

1976年から1996年まで図書館に関わって生きていたが、現在は一般事務に携わっています。停年前の最後のポストが図書館になるといいなあと思いつつ。大学図書館研究集会には、1981(嵐山)、1984(江島)、1987(大阪)、1990(筑波)、1991(一橋)の5回参加しましたが、非常に良い催しだと思っていました。

大学図書館員の質向上・スキルアップにつながるような研修制度・セミナーを企画・実施して欲しい。

- 経費と人手がかからないように工夫する。
- 研修と情報交換の場を提供。
- 人の前で積極的に発言出来ること。
- 社会全体を見たうえでの発言、意見発表。

アンケートの「お願い」には、「国公立大学協力委員会(*マ)で、大学図書館研究集会の共催を解消したい旨の提案があった」・・・そしてこれを受けた大学図書館部会の議論で、「両団体が類似したシンポジウムを重複して開催することの是非等々・・・の意見が出された」とあります。しかしながら大学図書館部会には施設会員があり、(形式上はともかくとして実態としては)各施設に属する職員はそのほとんどが国公立大協力委員会の傘下にある各大学の職員でもあるわけです。このような見方を敷衍すれば、協力委員会が出した結論は、実質的に研究集会の「開催の解消」に近いものと考えた方が良さそうです。この議論からはみ出すのは、大学図書館(広くは大学)に所属会員の意向ですが、これについては、まずは、今回のアンケート結果を精査していただくことが先決ではないのでしょうか? 組織のあり方等は急変しているのに、一方では長らく変わっていない部分も多いように見受けられます。部会のあり方、協力委員会のあり方等についても今後一層議論を深めていかれることを切望します。

国公立大学図書館で共有できるものは共有し、それぞれの条件に適した役割、特色を出しながら全体にコミュニケーションできる体制が必要。特に地域で結びつく現実に行えることがたくさんあります。現場で願っても限界です。是非、館長レベルで政策としてとりあげてほしい。

私立大学図書館にいる以上は、運営は母体の大学方針によるものかもしれないが、母体をも動かす力を図書館や図書館員が身につけたい。それには研修の充実と横の協力関係などを強固にしていきたいと思う。

1. 国公立の間の壁が高く厚い現状では、部会と協力委の存在意義は大きい。双方を発展させると同時に、両者の連携・協力をより密にすべきである。
2. 研究集会やシンポジウムは多いほどよい。
3. 図書館間協力に関して、やるべきことは多い。電子ジャーナルの一括契約、共同保存書庫、学生レベルの reciprocal borrowingなど。

大学図書館部会の活動について・・・大学図書館部会の活動内容がよくわからない。情報交換のためのメーリングリストもないし、メールマガジンも発行されていない。大学図書館に関する情報を会員に周知していこうという姿勢が見られない。もっとも会員に周知すべき情報がないだけかもしれないが、JLAのメールでも大学図書館関係の記事を見ることは、あまりない。専門職制度の発展に対する姿勢が希薄。国立大学の法人化に際して、専門職試験(種・図書館学)の実施が危ぶまれた。このことに関して、部会として何らかの声明を発表した、という話し(*マ)を聞いたことがない。何らかの要望がしかるべき団体に対して出されたということも聞こえてこなかった。また、図書館雑誌にもそれらしい記事を見た覚えがない。専門職制度の維持に対して積極的に活動を展開したような印象がない。このような部会に果たして存在意義があるのだろうか? 大学図書館に働く人に対して、日本図書館協会への入会の働きかけがされているとは思えない。

シンポジウム研究集会の開催について・・・国公立大学図書館協力委員会が何故、大学図書館部会との共催の解消を提案してきたのか、事情がよくわからない。予算の問題であろうか。本来、相互に協力して大学図書館界の発展に尽力すべき二つの団体が、あえて分裂しようとするのは理解に苦しむ。シンポジウム研究集会のテーマは設定を工夫すれば、類似したテーマとなることは避けられるはずだと思う。

個人会員選出の部会委員について(設問1dに関連して)・・・個人会員選出の部会委員が会議に出席するのに「休暇」をとって「個人で交通費」を出すというのは異常なことではないでしょうか。施設会員として国・公・私有力大学から6名も参加しているのですから、それぞれの個人会員が選出されている国・公・私大学に対して、少なくとも会議への出席を出張扱いにするように働きかけるなどできないのでしょうか?

アンケートの実施について・・・大学図書館部会がこのようなアンケートをおこない、会員の意見を集めようという姿勢は評価できる。

日図協では公共図書館職員を対象とした上級司書認定制度を計画しているようだが、司書資格の認知度と専門性をアップするのに、なぜ公共図書館だけを対象とするのか。他館種についてはどういう構想があるのか。大学図書館職員として等閑視できない問題であると思う。部会として十分に検討してほしい。

国公私委のシホ等が活発に行われるのはよいことだと思うのですが、企画を中心になって進める人が決まった人になる傾向があるように見えます。結果的に国公私委のイベントは方向性や妨が決まってしまうのではないのでしょうか。国公私委のイベントの方向性と違った企画を、国公私委とは違ったメンバーで行うことも大事なことだと思います。研究課題には事欠かない状況なら、類似したシホが重複して開催されることをそれ程心配する必要はないと思います。大学図書館研究集会の共催は続けて頂きたいです。年に一度のイベントなのでから。

大学図書館部会にも期待していない。JLAの中で場違い。問題意識が違いすぎる。お定まりの活動しかできないのではないかと。東京以外では、会員が少なく活動しにくい。

個人会員選出について・・・所属している機関がある場合、公文書を発行し、交通費を負担したり、出張扱いにできるようにできないのでしょうか。業務として扱うようにした方が良いのではないのでしょうか。

運営について・・・運営についてよく理解していないので、勝手なことを書かせていただきますが、運営の人手が不足していると聞いたことがあります。そのことを解消するため持ちまわりで、複数の大学が職員を出しあって事務局を運営できないのでしょうか。

部会と協力委員会の関係が論じられるのは当然のことといえるが、部会の意義は図書館界の中での大学図書館の存在感を左右するものでもあると思うので、軽視する方向にならないでほしい。日図協の各種事業や委員会で大学図書館員が個人会員として活動する場合にも部会として支援するくらいのことがあってよいと思う。

日本図書館協会の図書館関係情報は、公共図書館界情報が中心で、それ以外の意見の反映は少なかった。しかし、公共図書館は、昨今の社会からの批判に対応しきれず疲弊していると思える。1980年代前半までに基礎的サービスの展開を終えたのだから、次のステップへの向上に向けて方針が出るべきだったが出ず遅滞している。それが、社会からの批判の底流にある。公共図書館から現状打開の方向は、しばらく出ないでしょう。大学図書館界が先導して、大学図書館の試みが館界に反映すべきと思います。そのために、より効果のある研究集会は必要であり、知恵を出しあうためにも国公立大学図書館協力委員会との共催が望ましいと思います。

質問10に関して、交通費は協会予算から出す工夫が必要だと思います。

協力委員会はどうしても組織中心になりがちなので、部会や研究集会の意義は変わりません。大がかりな年中行事的なものではなく、研究中心、発表中心の研究集会をむしろ回数をふやすべきだと思います。一般の学会や研究会のように広く発表を募集して活性化すべきと考えます。

国大図協の活動は重要であると思う。しかし、図書館をとりまく情勢は「著作権」「公貸権」はもとより「指定管理職制」など大学図書（*マ）にもいづれ波及する問題がたくさんある。今は図書館全体が危機とも言える。そんな時、国公私大図協の活動だけで良とするのかギモだ。日図協にいろいろ問題があるにしても。

研究集会については、図書館大会に合わせてやることはできないだろうか。たとえば、旧追加してやるとか。大学以外の図書館との交流も図れるし日程の効率化もはかれる。

私は2004年3月末日で愛知県立大学長を退職し、正式には研究職にも教育職にもつかず、図書館員でもありません。たまたま愛知図書館協会会長に選ばれたため、また日本図書館協会の評議員となったため、その資格で大学図書館部会に参加しました。従って、設問に回答する基礎条件を欠如していることをご理解下さい。

しかしながら、一方では名古屋大学及び愛知県立大学名誉教授、他方では公立大学協会相談役または大学評価学位授与機構認証評価委員会委員等として、大学図書館の発展には関心をもっています。

「大学図書館研究集会」「大学図書館シホ」に単独にせよ、共催にせよ、存在自体があまり把握できませんでした。大学の常勤職員でしたが、図書館員でなかったので、特に会費だけが負担を感じていました。（雑誌は送付していただきましたが。）

他館種との連携・協力

地方の方（東京以外）にも参加しやすい、多くの講習会をお願いします。有料イベントのコンソシアムの推進もお願いします。

日図協に大学図書館部会があることに意義があると思う。

大学図書館研究集会の国公立大学図書館協力委員会との共催について、日図協側（特に常務理事）に熱意が見られないように思える。もっと「インパクト」をとらなければ意味がない。

私立大学図書館に勤めていますが、管理職以下、専任の図書館員はほとんどいません。そのせいか、業務全体にまとまりが感じられず、図書館業務のあり方も、他の課からは、あまり理解されていない状態です。私自身は専任とほぼ同じ仕事をしており、もっと自己研鑽を積みたいのですが、「パート」という立場では、それもままなりません。最近、図書館の業務委託が進んでいる様子ですが、専任以外の身分の館員の地位向上について、少しお考えいただけないでしょうか？

お世話になっております。内外から変革を迫られている大学図書館は、サービスの質までも切り捨てざるを得ないピンチに立たされている所が多いと思います。また、社会連携等で、利用者の幅や層も増え、かなり忙しくなっています。

大学図書館の存在意義、図書館職員の意識変革、利用者への教育・指導等、昔のままではたちゆかぬことばかりです。大学運営等に関わらなくてはいけない昨今、職員としては益々研さんを積むべき所ですが、日々の業務で精一杯です…。よくご指導、アドバイスをお願いしたいところで、図書館として大切なネットワークをぜひ活用していくとよいと思います。

大学図書館研究集会、重複するのでしたら、新しいシナジウムで発展的解消されてもよいのではと思います。いろいろなイベントの集会がありますが、末端の人でも参加しやすいものにしていただけるとうれしく思います。お世話様です。

日本図書館協会大学図書館部会は、あまり重きをおかれていないような気がする。日本図書館協会の活動が公共図書館を中心に行われている傾向があり、出張等もむずかしい。しかし、国公立大学図書館協力委員会「大学図書館シナジウム」のほうが理解しやすい。

日本図書館協会の活動が大学図書館部会に限らず個人会員には、浸透されていないような気がする。もう少し地方の会員方に対してのきめ細かい働きかけが必要に感じるし、活動等にも応援できるような体制になれると良いと思う。

設置母体館種を超えた大学図書館の交流と発展を目指す当大学図書館部会の外に、1980年に国公立大図書館協力委員会を設けた理由の一つは、より実務的・具体的な各館共通課題（相互利用ルール、書誌情報標準化、著作権処理等）の検討が必要な状況変化の中で、各設置母体代表の協議体の必要性が強まり、それを可能とする組織を立ち上げ、そこでの決定に一定程度の事実上の拘束力を生じさせる必要性であったとっております。

設置母体別の協会・協議会は、図書館協会の直接的な下部組織ではないため、協力委員会がそれらの国公立大の代表の組織として大学図書館を総括して様々な外部機関との交渉や取り組みを行っています。この委員の方の中には、日本図書館協会自体の活動の弱さの現状から、協会の組織である当大学図書館部会の活動の意義を疑問視する方もおられます。今回問題になっている「研究集会」協賛の是非の理由は、「類似した」企画を「重複して」行うことの無駄という捕らえ方のようですが、それを避ける企画を意識して工夫することが大切なのではないでしょうか。図書館協会の活動趣旨からも、研究集会はあらゆる現場の図書館員や個人が、自分の仕事の位置付けを把握できるような状況紹介を中心に、誰でも参加できるような企画とし、協力委員会のシンポジウムは、その活動趣旨に沿って、より細分化した実務上の課題の具体的な検討が可能な時間的・内容的な企画を工夫し、あわせて図書館関係者にとって研修・研究のチャンスをより多く増やしてゆく協力がどうしてもできないのでしょうか。協力委員会でも再考を期待します。